

進撃の巨人—蒼空の果  
てへ—

蒼葉 桜木

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

巨人に両親の命を奪われた少年『ソーマ・ヘンリエッタ』。

彼は、両親を殺した『鎧の巨人』への復讐を果たす為に調査兵団への入団を決意する。これは、少年が紡ぐ復讐と反逆の物語。

基本的にゲーム、進撃の巨人2のストーリーをベースにオリジナル要素を入れて進めます。ご了承下さい。

2019年9月22日、タグ追加しました。

# 目次

序章：反逆の少年

第1話

---

1



# 序章：反逆の少年

## 第1話

プロローグ―平 穩 崩 落 !! ―

突如として出現し、人々を喰らい始めた謎の存在『巨人』。

奴らによって人類は滅亡の危機に立たされた。生き残った人類は『ウォール・マリア』  
『ウォール・ローゼ』『ウォール・シーナ』からなる3重の壁の中に安全圏を作り、10  
0年もの間辛うじて命脈と安寧を保っていた。

あの日が訪れるまでは……………。

―壁内歴845年―

人々が壁を見上げている。ここは、城郭都市外縁地区ウォール・マリア南端より突出した『シガンシナ区』。ある日、10歳だった俺『ソーマ・ヘンリエッタ』はいつものように幼馴染の少女『エイン・シックロード』と他愛もない会話をしていた。その時、突

如轟音と閃光が奔った。

「なんだ？今の」

「地震か？」

何も分からない人達が語り合っている。すると、壁のある一点に異変が起こる。

「お、おい。壁に……手が無いか……?？」

ざわめき出す人々。すると、隣にいた少年がこう呟いた。

「巨人だ……。」

現れたのは、50メートルの高さの壁を少し超える大きさの巨人だった。その直後。

壁が爆ぜた。

「逃げろおおおおおおおっ!!」

「巨人が入ってくるぞおおおおおっ!!」

「うわあああああっ!!」

混乱し、恐怖に陥った人々が一斉に逃げ出した。

「何が起こったの……?？」

俺に不安そうに問いかけるエインの手を引き、俺は駆け出す。

「君たち、大丈夫だったか!？」

そう問いかけてきたのは、腰に対巨人用兵器『立体機動装着』が装備されている男だった。

「すみません。エインを……コイツを頼みます。」

そう言う俺は巨人たちが現れた方向へ……俺の両親が居るはずの家へ走り出した。

「父さん！母さん！居るか!?返事してくれ!!」

「ソーマ!!」

「無事だったか!!」

俺の両親は運良く生き延びていたようだ。

「父さんたちと逃げよう、こっちだ。」

俺は、この時両親と共に逃げられると思っていた。だが、現実はとてつもなく非情で、残酷だった。

もう一度壁が爆ぜる。そこには、まるで鎧の騎士のような姿をした巨人が立っていた。そして、そこにあったはずの開閉扉が無かったことを俺は混乱した頭で理解した。

何か巨大なモノがこちらへと降り注ぐ。そう、逃げる俺達の頭上にも。

「ソーマ!!」

地面に倒れた俺。そして、顔を上げた先には、巨大な岩が佇んでいた。ちょうど、俺と両親がいた場所に。

「嘘だろ……。父さん……。母さん……。大丈夫なんだよな……。返事してくれよ……。なあ、二人共!!」

勿論、返事が返る筈もない。

「あ……。あア……。アアアアアアアアアアツツ!!」

その直後から記憶は途切れていた。その後覚えているのは、運河を移動する船の上にあった事と、隣にエインが寄り添っていた事、どこかで見たような少年がこう叫んでいたことだった。

「駆逐してやる……。!!この世から、一匹残らず!!」

この言葉を聞いた途端、俺は何をすべきかはつきり分かった気がした。

「鎧の巨人……。!!テメエだけは……。俺の手で殺す!!」

—2年後—壁内歴847年

ウォール・ローゼ南方面訓練地。ここの教官、『キース・シャードイス』の怒号が響いている。俺の隣にいた兵士への罵倒……。恐らく、それまでの自分を否定し、真つさらな状態から兵士に適した人材を育てる為のプロセスなのだろう……。が終わる。キース教



官はゆつくりと足を進ませ、俺の目の前に立ち、怒鳴る。

「貴様は何者だ!!」

「ウォール・マリア南、シガンシナ区出身。ソーマ・ヘンリエッタです。」

「ほう？ 阿呆のような名前だな！ 何をしにここへ来た!!」

この言葉を聞いた途端、脳裏をあゝの光景が通り過ぎていく。そして、俺はあの日からずっと忘れることの無かった思いを口にした。

「俺は調査兵団に入って、あの日……俺から両親を奪った鎧の巨人をぶち殺す為、その実力を得る為にここへ来ました!!」